

書評

Sydney Shoemaker,
Physical Realization.
Oxford University Press, 2009.

坂井賢太郎

0. はじめに

本書の著者、Sydney Shoemaker は現在コーネル大学の教授であり、物理主義と機能主義をベースにした人格の同一性や時間と空間の哲学などの分野に影響力を持つ哲学者である。

本書の主なテーマは性質例化の物理的な実現がいかんにして起こるかということの説明と心的因果の擁護である。この二つは人間の心、および人格の同一性に関する彼の理論にとって重要である。なぜなら、彼が物理主義を維持しながら人間の心を説明するためには、人間の持つ心的なものも含む全ての性質が物理的に実現可能なことを説明せねばならず、Shoemaker & Swinburne(1984)で展開された、心的因果によってつながれた心的連続性が人格の同一性を構成するという理論を守るためには、その物理主義の枠組みの中で心的因果を説明しなければならないからである。心的因果はJaegwon Kimの「スーパーヴィーニエンス論法」⁽¹⁾により危機にさらされた。本書におけるShoemakerの戦略は、後述の「部分集合合理論」より心的性質の因果的力はそれを実現するところの物理的性質の部分集合であるとすることで過剰決定を回避しつつ因果的特徴に注目することで心的なものも含めた性質一般が物理的に実現可能であるとするものである。

1. 本書の具体的構造

第1章では導入として本書で展開される理論の骨組みが示される。すなわち、物理主義が真であるならば、全ての性質は微小物理的な状況（microphysical state of affairs）によって構成的に決定されるというものである。そして、このことは目に見えるものも含めた全ての性質例化が微小物理的な状況の中において実現されるということを意味する。そこで、本書の課題は、その目で見える性質の実現と微小実現（microrealization）、そしてそれらの間にある関係について説明を与えることである。その過程で心的因果、人格の同一性、物的構成、創発、感覚状態の現象的性格などの問題が取り上げられる。

第2章ではある性質が別の性質例化によって例化されることが説明される。ここで、あ

る実現された性質は、その実現者である性質を持つ性質という意味で二階の性質であると言われる。二階の性質間の因果関係を考えると先のスーパーヴィーニエンス論法により過剰決定になるか随伴現象説 (epiphenomenalism)、すなわち心的因果の否定になるか、二階の性質の因果的力は一階の性質の因果的力と同一であるとするKimの因果的継承原則 (Causal Inheritance Principle) をうけ入れるかのいずれかである。ここで、これらの結論を避けるためには、性質は因果的側面、すなわち前向き因果的特徴 (forward-looking causal feature) と後ろ向き因果的特徴 (backward-looking causal feature) で特定されと考えるのがよい。前者はその性質例化が引き起こす様々な結果であり、後者はその性質例化が引き起こされる原因である。ここで性質Pが性質Qを実現者として持つのは、Pの前向き因果的特徴がQの前向き因果的特徴の真部分集合であり、Pの後ろ向き因果的特徴がQの後ろ向き因果的特徴を真部分集合として持つときかつそのときのみである。これをShoemakerは「部分集合理論 (subset account)」と呼ぶ。例を挙げて確認しておくと、「雨が降っている」という信念 (Br) は因果的特徴に注目するとおおまかには以下のように表現できる。すなわち、それは「もし『濡れたくない』という欲求、『傘があれば濡れない』という信念と一緒に例化されたならば、それらを持つ主体が『外に出るなら傘を持っていく』という行動に結びつく」ような信念である。またBrは物理的性質 P_1 の中に実現されるとしよう。このとき、 P_1 は先の一連の信念と欲求を実現する物理的性質 P_2, P_3 を結合させ、傘を持っていくという行動に結びつける前向き因果的特徴を持つものとなるだろう。このとき、心的特徴に注目してこの因果的関係をみたとき、それは心的な因果的特徴と呼ばれ、物理的特徴に注目して因果関係を見たとき、物理的な因果的特徴と呼ばれる。Brは多重実現可能であるため、 P_1 以外でも実現可能である。ここから、 P_1 の後ろ向き因果的特徴はBrのその部分集合である。また P_1 が例化されると他の結果も引き起こされる。そのためBrの前向き因果的特徴は P_1 のその部分集合である。部分集合であるため、一つの結果に別個の二つの原因があるという過剰決定はおこらないし、心的な因果関係と物理的な因果関係が全く無関係であるという随伴現象説でもない。

第3章では、目に見える性質と微小実現の間の関係が説明される。ある性質が微小物理的な状況によって実現されるとき、その性質を Shoemaker は MSE 性質 (microphysical-state-of-affairs-embedding property) と呼ぶ。物理主義が真であると考え、形や大きさだけではなく、心的性質もこの MSE 性質またはそれにより実現される性質によって実現される。この意味で、MSE 性質のみが一階の性質である。この微小物理的な状況は大変複雑であるため、いかなる科学的な分類でもその特定の性質をとらえることができないだろうと Shoemaker は考える。ここで、一階の性質のみが因果的な仕事をするとき

えると、この微小物理的な状況を私たちはとらえることができないので、性質間の因果を考えるためには魅力的でなくなると彼は考える。すなわち、第2章の紹介の冒頭で述べたような因果的継承原則の支持者は二階の性質の因果的力について知ることができなくなってしまう。部分集合理論で考えると、二階の性質の因果的力は一階の性質の真部分集合であるため、過剰決定なしに二階の性質が因果的力を持つということができるのである。ここから、性質を因果的特徴から考えていくのがよいとする機能主義の動機が生まれる。

第4章では、実現と機能的性質の関係、創発する性質の身分、何が本物の性質であるかについて述べられる。第一の論点に絞ってこの章を紹介する。

Shoemaker は全ての具体的な性質は因果的特徴で特定されると考える。そうすると、全ての具体的な性質は機能的性質であるように思われる。しかし、これは全ての性質が存在論的に機能的性質であることを意味しない。ある性質が機能的であるのは、それが機能的概念によって区別されたからであり、結局その性質についてどのように考えるかに依存するのである。

ここから、Kim のある機能的性質が因果的力を持たないという議論が疑わしいものとなる。Kim はある機能的性質が写像可能でないこと (not being projectable) から因果法則の中で考えるのはふさわしくないとする。彼は「ヒスイである」という性質と「痛みを持っている」という性質を比べてこの写像可能でないことを導く。すなわち、ヒスイであることは硬玉であるか軟玉であるかの選言性質である。硬玉と軟玉は異なる鉱物であり、両者の共通点は表面的な類似性にすぎない。従って、硬玉あるいは軟玉のみのサンプルを与えられたと仮定すると、ヒスイであることを帰納的に定義することができない。痛みも同様である。痛みは様々な物理的性質の中で実現可能であるため機能的性質であると考えられる。そうすると、ヒスイであることと同様に、これも与えられたサンプルから痛みを持っていることに共通する本物の性質を写像することに失敗するかもしれない。ここからある機能的性質が因果関係の中での特定の性質を指示するかどうかは疑わしいと Kim は考える。

先に述べたように機能的性質であるかどうかはいかなる概念によって考えられるかに依存する。すなわち、ある性質が機能的か否かは存在論的な違いではない。ある機能的性質を持つとは、その性質に共通する何かを持つことではなく、その機能的特徴づけを満たすことなのである。

そして第5章では、ここまでの議論が他の三つの形而上学的なトピックに応用される。一つ目は、数的に異なる対象であるが同じ場所を占め、同じもので構成されている対象、すなわち共起する (coincident) 実体はあるか、特に人間 (person) とその身体は共起する実体でありうるかということであり、二つ目は時間を通じて存在する対象が耐続する

(endure) か延続する (perdure) するかの問題で、三つ目は物質の構成に関する問題である。この章も第一の論点に絞って紹介する。

Shoemaker の人格の同一性の理論は「新ロック主義」である。新ロック主義とは、人格の同一性は心理的な連続性によると考える。この立場は、例えば脳移植によって「身体交換」が起こり得ることを許容する。すなわち、人格はその身体と同一ではないということにコミットする。しかし、ここまでの議論で彼は、心的性質も含めたすべての性質は物理的に実現されると論じてきた。すなわち、整合性をたもつためには人格はその身体と同一ではないが物理的性質により実現されるということを説明しなければならない。これは先の議論を用いると次のように説明することができる。

性質一般は微小物理的な状況により実現される。対象はこれの連続した集合である。ここから、同じ場所に数的に異なり、種類を異にする対象が存在することが可能となる。すなわち、微小実体が (micro-entity) が同じ時点において異なる仕方での性質化され、関係づけられることで異なる微小物理的な状況を作り出すことが可能となるのである。

ここで、Shoemaker は性質を、共起するが異なる種の間で共有可能な「薄い」性質とある種、ある存続条件 (persistence condition) を持つもののみに属する「濃い」性質に分ける。この薄いと濃いは因果的役割の強さの違いである。人格を構成する心的性質は濃い性質の中においてのみ実現されるため、身体と同一ではない。しかし、その濃い性質も微小物理的な状況によって実現されるため、人格は物理的に実現されると説明できるのである。

第6章では、どのようにクオリアが物理的に実現されるかが述べられる。Kim は個々のクオリアはクオリアの本質的な性格より機能的に定義不可能であり、従って物理的に還元不可能かつ因果的力をもたないとする。Shoemaker は個々のクオリアの現象的性質を機能的に定義不可能であることは認めるが、それが因果的力を持ち、物理的に実現可能であると主張する。

まずクオリアであること一般は次のように機能的に定義できる。ある性質がクオリアであるのは、その性質が次のような性質の族に含まれるときである。すなわち、この族において同じ性質が二つ以上の経験の中で例化されたならばこれらの経験が質的に同一となるようなものである。そして、このようにクオリアを定義すると、それは因果的力を持つと言える。すなわち、クオリアは例えば、識別、認知などの中で経験の類似性や差異性を示すため、因果的力を持っているといえるのである。そして、このことと物理主義が真であるならば、クオリアは物理的に実現可能である。すなわち、部分集合理論より、あるクオリアの実現者とはその後向き因果的特徴の部分集合でありかつ、そのクオリアの前向き因果的特徴を含むような物理的性質であるとすればよい。ここから、心的性質を含めた性

質一般が物理的に実現可能であると考えることに障害はないのである。

2. 最後に

本書は性質の因果的特徴に注目することにより、性質例化が物理主義をとってどこまで説明可能かを幅広い最新の研究を盛り込んで探求したものである。やや難解であり結論がどこに書いているか明白ではないという構造上の欠点はあるが、精密な記述のおかげで正確に読んでいけば必ず内容を把握することができるだろう。

私は本書で展開される Shoemaker の物理主義+機能主義の理論に非常に共感を覚える。しかし、いくつかの点で不十分だと感じられる。その一つが、心的性質であることに十分な特徴づけを与えられていないということである。心的性質が物理的に実現可能であるとしても、それはいかなる点で異なるがゆえに物理的性質ではなく心的性質であるのか。この点に関して本書の記述は充分ではない。しかしながら、それは容易でないどころか、物理主義が超えなければならない大きな壁の一つであるのかもしれない。

非物理的なものとして考えられている心的出来事を物理的に説明し去るには、更なる理論構築がなされねばならないだろう。

註

(1) 「スーパーヴィーニエンス論法」とは、物理主義を取りかつスーパーヴィーニエンスを用いると心的因果の説明がうまくいかないことを示したものである。概略を述べると、物理的性質Pに心的性質Mがスーパーヴィーンするとする。このとき、Mと心的因果関係にあると思われるM*を取ってくると、M*は物理的基盤P*を持つ。このとき、M*はMとP*両方により決定されている。これは過剰決定である。また、MがP*に影響を与えるという形でM*に因果的な力を持つと考えると物理的閉包の原則を破ることになり、物理主義にとどまることはできない。ここから、心的因果、心身スーパーヴィーニエンス、物理主義の少なくとも一つを捨てなければならないとするものである。

文献

Shoemaker, S. & Swinburne, R. (1984). *Personal Identity*, Basil Blackwell. (1986, 寺中平治訳, 『人格の同一性』, 産業図書.)

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕